範疇としての空間に就いて

――習作の續き――

戸坂　潤

繰り返して云ふならば、存在の存在論的範疇は空間である。吾々は第一に「存在」に於て問題の手懸りを捉へ、第二に「存在論的範疇」といふ概念をばそれに當て嵌め、かくして空間を析出した。而も私の採つたこの途は、第一の點に於ても第二の點に於ても、常に空間――それが吾々の關心であつた――に行き着くことの出來るやうに、云はゞ目的論的に組み立てられてゐる。であるから今までの考への途上にあつては、何故にまづ吾々は「存在」といふ地盤から出發しなければならないか、何故に次にこの地盤に立つて「存在論的範疇」を求める方法を採らねばならぬか、は規定的には――反省的でないといふ意味で――説明されてゐない。無論この目的論的な述べ方が完備するならば、それは人々をしてこの「何故」といふ問ひを提出する實際的な動機をば失はせる筈である。この完備の終局がその出發點を justify するに違ひない。併し私はこの文章に於て無論そのやうな完備を期すことは出來ないであらう。である

から私は他の一つの手段を以て、卽ち規定的に說明することを以て、それに代へたいと思ふ。

吾々は何故に「存在」に於て手懸りを捉へなければならないのか。夫々の問題に於て夫々個有な手懸りがあるであらう。吾々が或る一つの問題を提出する時、それに應じて、理想的に云つて一定してゐなければならない一定の手懸りがある。空間の問題に應じては空間の問題に個有な手懸りがある。何人もこの種類の循環を承諾しなければならない。今空間の問題に於て或る一定の手懸りがなければならないことを承認したとして、問題は、この一定の手懸りが何であるべきかである。先づ一般に或る築かれた立場又は或る他の問題からの Konsequenz がこの手懸りであつてはならない。何となれば少くともその立場その問題によつて養はれてゐない人々にはこの手懸りは正に手懸りの正反對であらうから。それ故何人も彼が特に懷疑的でない限り――それは一つの築かれた立場であるから――承諾するであらう處のもの、この意味に於て常識的である處のものが手懸りとなるのでなければならない。（例へば懷疑的な立場から引き出されたデカルトの Cogito は常識的ではない。）さてこのやうな常識的なもの、而もその內で空間の問題に個有な或るもの、それを私

は[存在]と呼んだのである(前半一〇三頁を見よ)處で吾々は存在以外に地盤を求めることは出來ないか。存在とは內界に對する外界であり、精神に對する自然であり、要するに吾々が、例へば[無い]と否定する時――[在る]と肯定する時ではなく――その尺度として用ゐる處のかの存在である。[在るならば見せよ]と要求する時の存在である。無論云ふかも知れない。存在といふ言葉に對する吾々の――常識家としての――感覺はより自由であると。併しさう云ふ人でもそのより自由な存在と私の云ふ存在との區別を承認する――常識的に――に違ひない。そして吾々にとつてそれで充分である。何となれば人々がかく區別する時正にその時、人々が空間のことを思ひ浮べてゐることは明かであり、そして私の云ふ存在が恰も空間をば常識的に含蓄してゐる、といふことを人々は其處で告白してゐるのに外ならないから。空間が吾々の問題となる抑々の理由が存在に就いての吾々の常識的な定立に横はつてゐる。茲に空間の問題の手懸りを促へることは、それ故、極めて適切なことであるばかりでなく、それ以外には不可能であるといふ意味に於て必然的なことでもある。何故に存在が地盤とならねばならぬかゞ之で明かとなりはしないか。但し終りに注意して置かねばならぬのは、この手懸りこの地盤は、自らに就いて一定こ取り扱ひ

方を何も指定しはしないといふことである。之から出發するとも云つたが實は出發の場處は茲にあるとしても出發の仕方は茲に掲げられてはゐない。それは手懸りではあるが方法ではない。例へばデカルトの Cogito とか純粹經驗とかいふ出發點は出發の仕方を――方法を――已に指定してゐる哲學的に築かれた立場であるであらう。併し手懸りとしての常識はそれとは全く面目を異にしてゐる。そこには方法が指定されてはゐない。それ故にこそ又吾々はこの手懸りを手懸りとしてそこに任意の方法を試みることが出來るのである。處で存在論的範疇を求めるといふこの次の過程が恰も、手懸りとは必ずしも直接に關係しない處の――空間といふ問題を介しては間接に關係してゐるが――この方法であるのに外ならない。

次にそれでは吾々は何故に空間を「存在論的範疇」として求めなければならなかつたのか。この問ひは次の二つの問ひの和に分解することが出來る。即ち、第一に、吾々は何故に空間を一般に範疇と見做すか。及び第二に、吾々は何故に空間を――それが一般に範疇であるとして乃至は無いとして――存在論的と考へねばならぬか、の二つの問ひ。

第一の問ひ。私は向に範疇としての空間は存在論的制約であることを主張しや

うとしたのでるるから、そしてこの問ひは之を理解させるやうに答へられるべき筈であつたから、今の場合には範疇をば一般に制約といふ意味に理解してをくのが必要である。範疇とは制約のことであると假定しやう。そこで空間は何故に範疇と考へられねばならぬか。空間の理論の內最も吾々が慣らされてゐるかのやうに思はれるのは空間表象のそれである。吾々は確かに空間の表象を持つてゐる、これは疑ふべくもない事實である。そこで心理學は之をどう說明するか。この場合二つの說明の仕方——その間に切り離すことの出來ない連絡はあるが——を區別出來ると思ふ。一つは始めから空間表象を與へられたものと假定しその上でそれの色々の規定を見出さうとする仕方である。例へば空間闕の研究、空間に關する錯覺の研究などが之に屬してゐるであらう。この種の研究は已に空間そのものを豫想してゐるから從つてその限りに於て、空間とは何であるかといふ空間そのものゝ研究ではなくして、空間の持つてゐる種々な Merkmale の枚擧とその關係づけであるのに外ならない。それ故この說明の仕方は限りなく進むにも關らず遂に空間が空間である所以のもの——空間とは何であるかと問はれたもの——を說明することは出來ない。そこで之を說明しやうと企てるのが他の一つの說明の仕方である。卽ち

空間の發生の問題がそれである。發生といふ時人々は往々直ちに種屬發生的な又は個體發生的な發生に思ひ到るかのやうであるが、併し少くとも空間表象に就いては、このやうな發生の概念――それを anthropologisch と呼ぶとすれば――の外により實りあるも一つの發生の概念――之が心理學的と呼ばれるべきである――が行はれる。吾々は寧ろこの發生をば最も廣い意味に於て空間表象の構成と呼ぶのが適切であらう。併しながら空間表象のこの構成は恐らく歴史上成功を齎すことが出來なかつたのが事實である。無論このやうに不成功に終つたといふことは單なる事實に過ぎないが重大なのは、その理由は、人々が空間表象の發生を説明しやうと企てながらその説明の原理をば常に空間表象そのものゝ内から借りて來るといふ循環を犯してゐたことにある。この事實はやがて空間表象の發生を説明することが原理的に不可能であることを想像させるであらう。云ひ換へれば空間表象は他のものから發生するものではなくしてそれ自身獨立な根源的なものであることを思はせるであらう。空間表象のこの根源性を主張したのはシュトゥンプ (Ueber den psychologischen Ursprung der Raumvorstellung) である。*

* この點に就いて私は己に紹介と批判との多少を試みた。「思想」五十七號。「幾何

學と空間」參照。

さて茲で考へて見なければならないのは、空間表象の發生が說明され得ないものであるにも關はらず何故に心理學者のかくも多くがそれを試みたのであるか、といふことである。無論それはその發生が說明されさうに見えたからであるに違ひない。心理學者は彼が生理學者や生物學者でない限り恐らく感覺――單純感覺のやうな――の發生を說明しやうと試みはしないであらう。それは說明されさうには見えないから。處で空間表象が說明されさうに見える理由は何處にあるか。複雜であるからである、少くとも單純感覺に較べては複雜であるやうに見えるからである。といふのはより高次のものと考へられるからである。處で低次のものと高次のものと關係は、少くとも心理現象にあつては低次のものゝ構成によつて高次のものを致すのか、それでなければ高次のものゝ分析によつて低次のものに到るかである。處が向に述べたことによつて構成は不可能であつた。それ故高次のものゝ根源性を承認した上でそれの分析によつて感覺に到る途だけが殘される。卽ち空間表象の根源性を承認しその部分或ひは要素として例へば觸覺を說明するといふ途だけが殘される。もし空間表象も亦單純感覺と同じ直接さに於ける感覺乃至知覺であ

るとし、それがそれとは異つてゐるが併し常にそれと結び付いてゐる色の感覺の如きものと拜べられるならば、兩者を常に結び付けてゐる第三のものが丁度今の場合の高次のものである。（シュトゥンプを見よ。）處がこの第三のものは又空間表象でなければならないであらう。何んとなれば色と形態とがこの第三のものに於て結び付くと云ふが、兩者は云はゞ同じ權利を持ち寄つて第三のものになるのではなくして、色は常に形態に含まれるのでなければならないのに、逆に形態が色に含まれると云ふことは言葉通りには意味がないのであるから。このやうにして空間表象の根源性の主張は、空間表象そのものに固有な性質――この性質を云ひ當てるために空間表象といふ概念が色々の困難に出會はねばならなかつたのである――からして、必然的にその高次性（それが感覺や知覺であらうと無からうと）の主張とならなければ徹底しない。今それが高次であるならば低次のものはその分析によつて、それに基いて說明される筈であつた。低次のものはそれを條件として始めて一般に考へ得られるのである。さてこのことは形態心理學がGestaltwahrnehmungの名の下に於て實驗的に指摘しやうと試みてゐる一定の心理的な事實であるばかりではなく、又その心理學をばこの方向に導く理念としてのエイドスをも含んでゐる。このやうな

本質は正當な或る意味に於ける心理學の範圍の內に橫つてゐる事柄ではあるが、心理學を離れる自由を持つてゐる今の場合の吾々にとつては、それは或る一つの哲學的な解釋の土臺となることが出來るのでなければならない。といふのは、吾々はこの本質的な事情を解釋して次のやうに云はうと欲する。卽ち空間表象は他の感覺——色の感覺や觸覺のやうな——を成り立たせ又考へられ得るやうにする處の條件、吾々の言葉を用ゐるならば一つの「制約」であることを、それ自身に於て指してゐると。空間表象の近似値的な理解はそれが制約であるといふ解釋によつて、卽ち始めの約束に從へばその限りに於て範疇であるといふ解釋によつて、極限的な理解へ飛躍することが出來るであらう。多分之と同じ事情に由來する處の、そしてより積極的に空間表象を範疇と解釋させる處の、も一つの理由がある。心理學者は普通視空間と觸空間とを區別する。無論この區別には充分な理由があることである。併し、兩者の關係は心理學に於てどう考へられるのであるか。空間表象の Merkmale を枚擧しそれを關係づけるといふ研究にとつては、兩者の關係はその比較といふ程度以上には恐らく問題の範圍の內に這入つて來なくても濟むであらう。併し之に反して空間表象の發生を說明しやうとする時或ひは寧ろその根源性を主張しやうとす

る時、兩者の區別は直ちに兩者の關係の終局の關係を要求しないではゐられない。空間表象が根源的であるとする以上云ひ換へれば空間表象がそれ自身に於て獨立なものである以上、そしてそれは視空間とか觸空間とかでなければならないのであるから、視空間も觸空間も各々獨立な卽ち他から導き出すことの出來ない表象であるに違ひない。であるから視空間と觸空間とが全く別であるか或ひはさうではなくして全く一つのものゝ二面であるかの何れかでなければならない。處が全く別であるとすれば兩者が同じく空間といふ名に値ひする理由は何處にもない。無論唯だ偶々同じ言葉が使はれるに過ぎないと云ふならばそれまでゝあるが、さうすれば視空間と觸空間とを區別する――空間の名に於て――元來の理由が忘れられて了ふ外はない。吾々は――心理學者であるとないとに關係なく――兩者が何かの關係――空間の名に於て――に於てあるといふ事實をば實は始めから承認して掛つてゐるではないか。もし何かの關係があり且つそれが同じ空間の名に於ての關係であるならば、さうすれば兩者は全く別であることは出來ない筈である。さうすれば兩者は全く一つのものゝ二面でなければならないことゝなる。私の知る限りでは心理學は兩者のこの同一を當然な事實として許してゐるやうに見える。そし

てこの當然な事實が吾々にとつて再び或る一つの哲學的な解釋の土臺となるのである。といふのはこの事實は、空間表象が、視覺とか觸覺とかの一般に空間的と考へられる個々の感覺をば超越してゐるといふことを指す。視覺と觸覺とは視空間と觸空間とを通じて第三のもの卽ち空間表象そのものに結び付けられてゐる。空間表象は云はゞ視空間や觸空間よりも高次のものなのである。そして高次のものは前の推論を繰り返へすことによつて「制約」でなければならない。更にこれは空間表象が本來は空間的でない處の或る感覺にまで自らを强制する力に於て他の一つの徵候を現はす。それは聽空間といふ概念である。音は或る方向から來るであらう、併し音するのは少しも空間的ではない。(觸覺や視覺はこの點に於て全く聽覺と異つてゐる。それにも關らず吾々は聽覺が空間的であるかのやうに考へ易い、それが空間表象が聽覺に致す强制力を云ひ表はしてゐる。單なる視覺や觸覺は聽覺へこのやうな意味で干涉することは出來ない。この干涉が成り立つのはその何れをも超越する空間表象の遊離性から來るのでなければならない。空間表象のこの遊離性は、それが個々の感覺から制約されるのではなくして却つて或る意味に於て個々の感覺を制約出來る、といふ可能を云ひ表はす。視覺と觸覺とをば視空間と觸空間

とを通じて結び付け又區別するのは、正に或る意味に於て凡ての感覺に共通である處のこの空間表象である。特殊な意味を附けてアリストテレスの言葉を借りるならば、空間表象は一つの「共通知覺」*であるとも云ふことが出來るであらう。吾々が視空間觸空間といふ時、又は更に聽空間とさへ云ふ時、その制約となつてそれを統一的に理解せしめるものは共通知覺とも云ふべき空間表象のこの範疇性にあるのである。

＊普通「共通感官」と譯されてゐるが「共通知覺」と呼ぶ方が適切であると信じる理由がある。

空間表象といふ概念が空間に就いて云はゞ主觀的な概念であるとすれば、之に對して云はゞ客觀的なものは物理的空間である。從來經驗の對象であるといふ意味に於て漫然と經驗的空間と呼ばれてゐるものにそれは起源を持つ。そして幾何學も又この經驗的空間にその個體發生論的な原因を持つてゐるであらう。併しこの經驗的空間に關する認識の發展は、經驗そのものがさうであるやうに、物理學的な研究――最も廣い意味に於ての――によつて起こされる。物理的研究が一般に空間の認識を助長するにどれ程缺くことの出來ないものであるかを人々はよく口にする

(例へば Mach, Space and Geometry 參照。同時に逆に吾々は空間の認識が又どれ程物理學の發展に缺くことの出來ないものであるかを見逃すことは出來ない。かくして物理的空間は單に普通の意味に於ける經驗の根本的な要素であるばかりに止らず、やがて物理學に於ける根本概念でなければならない。處が物理學に於ける根本概念は恐らく限りなくあるであらう。併し物理的空間はそれ等にも增して根本的と考へられなければならない理由を持つてゐる。といふのは、物理學が或る一定の方法――方法といふ意味を最も正當に廣く解するとして――に基いて一定の對象を取り扱ふのであるとすれば、物理的空間は單にこの意味に於ての對象に屬すばかりではなくして、正に今の廣い意味に於いての方法にも屬すのでなければならないからである。恰もデカルトが、吾々の知識を深め廣めるための最上の仕方は、對象をばまづ大小の大きさの比に還元し、次にこの大きさの特殊なもの――延長――の形に於てそれを吾々の心 (imaginatio) の前に据ゑることである、と云つたやうに、延長は一般に明晰判明な認識への手段であることを認めなければならない (Regulae ad directionem ingenii XIV)。實際自然科學者が、認識しやうとする時は、まづ認識の對象を量の關係に引き直し、更にその量を計量する時必ず空間的な量を用ゐずにはゐられないで

あらう。物理學に於ける空間も亦この意味に於てその手段、方法でなければならない。處が計量を實行する場合――それを測定と呼ばう――吾々は單に空間に於て計量するといふだけではなくして、更に何かの意味に於て實證的な手段に賴らなければならぬ(例へば光とか物質とか)。從つて空間そのものも亦この手段によつて始めて測定されることが出來るのである。かくして云はゞ先驗的であつた空間は今や經驗的に規定された空間となる。單に方法であるに過ぎなかつた處の、從つてそれだけ對象に向つて無關心であつた處の、空間が亦對象そのものとなるのである。併しこのことは空間が方法でなくなつたのを意味するのではなく、却つて正にそれが自ら對象とならねばをかぬ程それ程對象に忠實な方法であることを示してゐる。例へば法則を發見するといふことは確かに自然科學の方法であるかも知れないが、併しこのやうな方法そのものは自然科學自身に於て對象として行はれる法則ではなくして、寧ろ認識論が自らの對象としての自然科學に與へる處の法則――さう呼ぶことが出來るならば――であるであらう。それは外から云はゞ形式的に與へられた方法である。之に對して物理的空間は內から云はゞ實質的に見出された方法である。實質的であればこそその方法が更に又對象となることも出來たのである。

かくて物理的空間は物理學乃至普通云はれる處の嚴正科學の內部から萠え出た方法でなければならない。*

* 曾つて私は非常に不充分ではあつたが、この點に就いて多少內容に立ち入つて述べた「哲學研究」一〇七「物理的空間の實現」參照)。尙ほこの點及び次の點に就いては「哲學研究」一〇六「物理的空間の成立まで」參照。

處で問題は物理的空間がこのやうな意味に於て方法であるといふ事情をば、吾々は何と解釋すべきであるか、に來る。併し凡そ方法といふものはそれがどういふ種類のものであるにしても、對象に對して偶然でない限り、常に對象の制約でなければならない。それ故今もし物理的空間が物理學的世界形象の成り立つ制約でないとするならばそれが物理學の認識の方法となる理由はない筈である。であるからして物理的空間は物理的世界形象の制約でなければならない。かくて物理的空間にあつても亦空間は「制約」としての性質を直接に指摘されてゐるのである。從つて又その限り範疇的と解釋されてよいわけである。さて私は今までに何故に空間が範疇と考へられるかを說明するために、二つの主な理由を揭げて見た。無論茲に要求されてゐるのはその說明であつて決してその證明ではない。何となれば之を證明す

ることが假に出來る性質のことであるにしても、それは明かにこの文章の全體の後に始めて成り立つべき筈のものであつて、決して今の場合のやうな途中に於て盡されることの出來るものではないからである。併し少くとも空間を範疇と考へねばならぬ必然性――それは論理的な必然性ではないが――は茲に充分に示されたであらう。何故ならば今までのことを裏から反覆して見れば、向の二つの事情、空間表象の根源性と物理的空間の方法的な性質とは、もし空間をば制約といふ意味に於ての範疇でないと考へるならば、解くことの出來ない夫々の困難を持つことになるから。併し飜つて考へて見れば、空間が何かの意味で範疇であるといふ主張又は豫想の、必ずしもその證明の(或ひは寧ろ說明の)責に任じる必要はないかのやうである。この豫想を共にしてゐる多くの――それを疑ふものに較べて多くの――哲學者の內から例へばフィヒテ*をその代表者と解釋することが出來るであらう。人々は又言葉通りの言質をばコーヘンに於て(Allheit の Kategorie) 捉へるであらう。たとへこれ等の人々が空間そのものゝ理解ゆゑよりも寧ろ恐らく夫々の體系ゆゑに、空間を範疇と考へたのであるにしても。

* Für (Kant) bedarf idealer Objekte, um Zeit und Raum zu füllen; *wir bedürfen der Zeit und*

des Raumes, um die idealen Objekte stellen zu können. (Grundlage der gesamten Wissenschatslehre, Fichtes Werke Bd I. S. 381.) と云ふてゐる。

吾々は第二の問ひに來る。空間は――それが一般に範疇であるとして乃至は無いとして――何故に存在論的と考へられねばならぬか。これに答へるために私はまづ空間が主觀的とも客觀的とも考へられないといふことをこれから證明する。主觀的ではないといふことから始めやう。先づ吾々は空間をば、物から區別しなければならない――之は前半に於てもすでに觸れる機會があつた。空間と物との區別は何人も認めなければならないと思ふ。人々は物が空間の「内に」あるとも無いとも考へる自由を事實上有つてゐる、そこに兩者の區別がある。或ひは云ふであらう。空間關係を解して物が空間の「内に」あると云ふことは困難と無意味とに終らねばならぬ、何となれば「内に」といふことがすでに空間關係であるから、向のことは空間と物とが空間關係に於てあるといふことである、卽ち空間が空間の「内に」あることゝなるからである、と (Lipps, Die physikalischen Beziechungen und die Einheit der Dinge.)。これが果して空間に就いての困難や無意味であるにしても又ないにしても、少くともこの困難や無意味が空間に於てゞあつて物に於てゞはないならば、物と空間との區別を求め

てゐる今の場合にとつてはそれは却つて一つの證言となるであらう。兩者は別である。そこで吾々は兩者をどう特徴づけてその區別を確定してよいか。物と云へば色々の物が考へられるに違ひない。まづそれは種々な性質を有つてゐる。處で今その性質を出來るだけ消去して行く時最後に到達することの出來るものは物質と云ふ概念でなければならぬと私は考へる。物質は多分空間の内にあるであらう、併し空間の内にあると云つても例へば圖形があるやうにあるのではない。圖形は空間をば或る觀念的とも呼ばれる限界によつて切りとつたものに外ならぬが、明かにこの手續きによつては物質が生じはしない。物質の圖形――例へば原子のやうな小宇宙の圖形を考へればよい――「に何物か」を加へたものに相當しなければならない。吾々はこの何物かをば最も廣い意味に於ける――單に物理的ばかりではなく心理的に見えること觸れることなどをも含めた――不可侵透性 (Undurchdringlichkeit) と呼んでよいであらう。このやうな不可侵透性は圖形の上に更に加へられるといふ意味に於て、圖形とは別であり從つて又空間とは別である。從つて廣く物と空間とのかの承認された區別の基は實は不可侵透性との空間との區別にあつたことが判る。處がこのやうな廣い意味に於ける不可侵透性は恰も吾々が「可感的な

實在」と呼んであるものに相當する。Realität, Wirklichkeit と名づけられるもの――經驗界に於ける――がそれである。それ故空間は今やかゝる「實在」乃至「實在性」から區別された事となる。實在性は可能性や必然性と共に Modalität にぞくす處が空間はそのやうな Modalität にはぞくさない――この事は屢々混同されてゐる。空間は實在ではない。リップスは空間の實在性をば次の理由によつて否定しやうと考へる。卽ち、空間關係は「物と異る限り空間的には何處にもない」、又物と物との間隙の空間は無であり而も有であるが有であれば物との區別がなくなるから無でなければならない、と (Zur Frage der Realität des Raumes)。併しながら少くともこの理由は不用である。何となれば、空間が實在性を有たないのはそれが空間的に何處にもないからではなくして空間が始めから物と異なるからであり、又無であるからではなくして空間が始めから物と異なるからである。物は實在であり空間は實在ではなかつたからである。實在的な空間といふことが始めから contradicitio in adjecto である。さてさうとすれば空間は real ではなくして ideal でなければならない――Idealität は Modalität にはぞくさない。そこで直ちに空間が主觀的であるかのやうに思はれ易いのである。併し私はこの觀念性をば分析して見る必要がある。まづ觀念性を先驗性 (Transzen-

dentalität) と現象性 (Phänomenalität) とに分解することが出來るであらう。茲に先驗性とは一般に、カントの云ひ方を借りれば、經驗と共に始まるが經驗から生じるのではなくして却つて經驗の制約となるといふことを意味する。卽ち今の場合に當て嵌めれば實在ではないが實在の根據となるといふ意味である。處で空間は恰もこのやうな先驗性を有たなければならない。何となれば、空間は物質(それが經驗的なもの乃至實在であつた)と共に始まる――人々は物なくして空間があり得るかを、卽ち虛空間の可能を疑ふことさへ出來るから――にしても、物質から生じるのではなく――Modalität に屬する實在からはそれにぞくさない空間を引き出すことは一切不可能であるから――、却つて物質の存在の制約となる――空間が一般に制約であることはすでに說明されたが今やそれは物が空間の[內に]あることである――からである。併しながらこのやうな意味に於ける先驗性からは或る人々の考へるやうには主觀性は出て來ない。何故ならば已に私は最初に一般に存在論的範疇――それは主觀的ではない――が可能であることを述べたが、それも亦正にこのやうな先驗性の內に含まれてゐなければならぬからである。もし夫から主觀性が出て來ると思はれるならば、それは先驗性としての觀念性からではなくして偶然之と結び付いて

ねた「或る他のもの」からでなくてはならぬ。それ故空間の所謂先驗性からその主觀性を導き出すことは出來ない――たとへ後者から前者を導き出すことが出來るにしても。それでは次にこの「或る他のもの」とは何か。それが第二の現象性に由來してゐるのである。處で吾々は現象性を又二樣に解釋出來ると思ふ。第一に私はまづ吾々にとつて直接であるもの一般を考へて見やう。といふ意味は吾々は常に何かの立場に立つてゐるのであるが、そして向に云ひ及ぼした處のかの「手懸り」としての常識も亦さうであるが、今の場合での直接といふのは之のことではない。ではなくして何の立場にも立たない處の(これも亦一つの立場であるとも云はれやうが常識的には必ずしも直接ではないが併し哲學の出發にとつて直接である處の、直接さを指す。人々は之を特殊の意味に於て經驗とも云ひ思惟とも呼ぶであらう。がけれどもそのやうな一定の規定を與へない內に吾々はそのやうなもの一般をば、正當な理由を以て、現象と名けることを許される。直接なものは現象である――之が現象性の第一の解釋。處でこのやうに解釋された現象性はそれが直接であるその故に少くとも主觀性となることは出來ない。何となれば主觀性とは主觀と客觀との對立といふある一定の――認識論的な――立場に立つての上のことであり、而もこ

の對立を認めない處の從つてそれだけ直接であり現象的である處の他の――存在論的な――立場(それをしも立場と呼ぶならば)が已に揭げられてあるからである。從つてこの現象性によつては空間は主觀的と考へられる途を斷れてゐる。殘るのは現象性の第二の解釋である。この場合まづ最も廣い意味の實在――物自體――があり、それが吾々に働きかけ(Dinge an sich uns affizieren)又は吾々がそれを寫し(Rezeptivität)、それらの或る意味に於ける結果が卽ち、實在が吾々に現はれる、といふことである。茲に成り立つのが現象に外ならない――之が現象性の第二の解釋。自體にあつては實在であるものが吾々に向つて卽ち主觀に向つて現象にまで墮して來るのであるから、この解釋による現象性は主觀性そのものなのである。であるから空間が觀念的であるといふ理由によつて――他の理由による場合は知らないが――主觀的と考へられる餘地はたゞ茲にだけあるわけである。さて飜つて考へて見れば、私が最初に許したのは空間の觀念性だけであつた。そしてその觀念性は決して第二の解釋による現象性を必然的に要求しはしなかつた。

そこで觀念性をこの現象性にまで解釋し直すには觀念性そのものから出て來ない處の主觀といふ轉語が是非とも必要であつた筈である。かくして空間の主觀性

に就いて人々が信じ勝ちである處の必然性が今は取り除かれたことになる、空間の主觀性は觀念性によつて權利づけられるのではなくして却つて主觀といふ轉語によつて自ら自らを權利づけてゐるに過ぎない。*今や空間は主觀的でなければならないといふ主張の一つ――恐らく最も尤もらしく見えた――は否定された、けれどもそれが一般に主觀的であつてはならないといふ主張はまだ肯定されてはゐない。之を肯定するために私は、もし假に空間を何かの理由で主觀的と考へ得るならば、卽ちそのやうに主客の對立を許すならば、空間は寧ろ主觀的よりも却つて客觀的と考へられる方が正しいといふことを示さう。

* 觀念性と主觀性、實在性と客觀性との區別を正當に說いたのはA. Marty (Raum und Zeit, S. 140—160 etc) であると思ふ。たとへ彼のカントの空間に對する批評が一般に必ずしもカント學徒を說服するに足りないであらうとも、少くとも今の點に於ては彼はカントに對する新しい解釋の徒勞でないことを實際に示してはゐないか。

何故に空間が主觀的と考へられ易いかは凡ての場合を通じて、恐らく空間が表象であると考へられることから理解出來る。何となれば表象は普通意識にぞくすと考

へられ、意識は又普通主觀にぞくすと考へられてゐるからである。併しながら意識が凡ゆる意味に於て主觀にぞくすといふことも、又表象が凡ゆる意味に於て意識にぞくすといふことも、終極に於ては一つの疑問であるかも知れない。假にそれを何れとしても更に、空間が凡ゆる意味に於て表象であらうといふことが誤りである。空間表象と區別された空間、例へば幾何學的空間、物理的空間を忘れてはならない。尤も空間が他に優つて特に表象と考へられるといふことには理由――それを茲に說明する餘裕はないが――のあることであるかも知れない。その理由が正當であるならば空間卽空間表象と見做してよい。さうすればそれは相當の理由によつて、但し重大なことには二三の疑はしい條件の下に於て始めて、主觀的と考へられるであらう。處が元來表象(表象といふ概念ではない)とは例へば概念が概念そのものとしてあるやうに形式的――實質的に對して――であるのではなくして、表象內容(表象といふ概念內容ではない)を有つてゐなければならない。表象といふ概念內容によれば成程表象は主觀的であると考へられ得るかも知れない。けれどもそれは表象內容が主觀的であることゝは全く別である。そして少くとも空間表象の表象內容は主觀的ではなくして一應客觀的であることを認めなければならない(空間の主

觀性が疑はれ易いといふ根據が常に茲に横つてゐる。といふのは普通に空間表象は一種の關係の表象であると思はれてゐるが、もし單に關係の表象であると云ふだけならば、吾々は之を例へば「これかあれか」の關係の表象からどう區別するのであるか。同じく關係と云つても――それは formal な概念である――空間には空間に個有な關係――それは regional な概念である――があるのでなければ、形式的に關係と名づけることすら理由がない。今關係といふ形式的な概念は相對的といふ概念内容を有つてゐる、がけれども空間關係といふ領域的な概念にはこの相對的といふ概念内容の外に更に絶對的といふ概念内容が這入つて來なければならない。例へば四寸と八寸との關係と一尺と二尺との關係とは形式的には卽ち相對的には同一の一對二の關係であるが、之に反して領域的には卽ち絶對的には決して同一の關係ではない。今更に概念内容を離れて空間表象そのものゝ内容に來るならばそれは本來成る絶對的な表象内容であつて、その上にあつて偶々形式的に相對的な關係が成り立つに過ぎないことを見るであらう。空間の表象内容はこのやうな絶對者である。そしてこの絶對者は主觀ではなくして客觀に外ならない。このやうにして空間表象は客觀的であると云はなければならない。マルティーの言葉を借りるなら

ば、所謂 Gestaltqualität がこの客觀を意味する絶對者である (Raum und Zeit. S 77—8 u. a. o.)。さてこれまでに明かになつたのは、空間をば(或ひは空間表象をば)主觀的と考へ得る位ゐなら、卽ち主客の對立を許してよい位ゐならば、寧ろそれを客觀的と考へることが事情の上からして必然的である、といふこと。之は但し「主客の對立を許すならば」といふ條件の下に於てさうなのであつた。然るに私は今やこの客觀的であるといふことさへ疑はずにはゐられない。

空間表象の表象內容が客觀的であると一應考へられると云つたが、私は客觀の意味を二つに區別する必要がある——前半を見よ。その第一は認識の普遍性と必然性と、卽ち眞理の妥當性であり、その第二はそれ自身客觀といふ言葉によつての外は理解出來さうにもない處の所謂客觀である。空間表象が表象內容として有つてゐる客觀性は明かに第一の意味の失れではない。從つてそれは第二の意味の客觀である外ない。處が第二の意味に於て(以下はこの意味での客觀を取り扱ふ)一般に何かゞ客觀的であると云ふ時、普通吾々はある一定の Sphäre ——それが客觀である——をまづ思ひ浮べ、之にこの何物かゞ屬すと考へ做してゐる(之が第一の客觀と區別される根本である)。云ひ換へればまづ客觀といふ何かゞ設けられ何物かはそれに

含まれたと考へられて始めて客觀的と呼ばれる。もう一度云ひ直せば客觀そのものが客觀的なものを超えてゐることによつてそれを成り立たせてゐると思はれてゐる。吾々が客觀的と考へる時、その心理を解剖すればさうあるであらう。云ふならば客觀は客觀的(對象論的な用語Objektivとは關係がない)と區別され得る。少くとも多くの場合にあつてはさうである。そこで空間表象が客觀的であると云はれ得るならば、それをば客觀的であらしめるもの、客觀は何か。空間表象はどういふ客觀に含まれることによつて客觀的と呼ばれる動機を有つのか。處がそこにはこの客觀に相當するものは何もない。といふのは空間表象をして客觀的であらしめるものは、それが空間表象であるといふことそのことの外にはない。この場合客觀的とは空間的といふことである。事實人々はこれ以外に空間表象を客觀的と呼ばせてをく動機を指摘出來ないであらう。そこで私は次のやうに推論する。まづこの場合吾々は客觀性といふ一つの事情を次のやうに理解するか、卽ちそれは何物かゞ客觀に含まれることによつて客觀的となることであるとする(さうすれば向の說明によつて客觀と客觀性とは別でなければならない)か、それとも客觀性といふこの事情に於て實は空觀と客觀的とを區別出來ないとするか、である。處が向に述べた事情

からして空間表象を含む處の客觀は無かつたからして、空間表象は客觀的ではあり得なくなる。併しそれは他の一つの事情卽ち空間は客觀的であるといふ出發點に矛盾する。それ故前者は成り立たない。さて後者であるとしやう、卽ち客觀的＝客觀としやう。處が空間が客觀であるが故に空間と呼ばれるのではなくして何となれば客觀とは今の場合を離れてはそれ自身は不定な概念であるから逆に客觀が空間であるがために始めて客觀と呼ばれる理由を得て來るのであるから、空間表象を客觀と呼ぶ動機は空間表象そのものゝ內に含まれてゐなくてはならなかつた。之を云ひ直せば空間表象が客觀といふ概念をこの場合始めて成り立たせてゐるのである。處が元來客觀といふ概念は主觀といふ概念と共に相豫想し合ふ――前半を見よ。さうすれば空間が客觀を成り立たせる時すでに又主觀をも成り立たせてゐなければならない。何となれば空間以外に客觀といふ概念を成り立たせる理由が無かつたのであるから。從つてその意味に於て空間はこの場合の主客の對立を可能にしてゐるのである。主客の對立がまづあつて然る上に空間が成り立つのではない、といふのはまづ始めに主觀と客觀といふ二つの Sphären が設けられてあつて空間がその何れかに這入つてゐるといふのではない、さうではなくしてまづ空間があ

りその表象内容を客觀と名づけること――それは客觀といふ Sphäre にぞくしてゐることではない――によつて主客の對立が可能となると云ふのである。繰り返して云へば、空間を客觀と呼ぶことが許されるならば(客觀の Sphäre にあるといふ事ではない)、その時同時にその空間は主觀を含んでゐなければならない。故に空間は主觀ではないといふ意味に於ては客觀であるとは云へなくなる、卽ちそれが特に客觀であるとは云へなくなる。從つて又客觀的でもあり得ない(客觀的＝客觀と假定してあつたから。さて空間が客觀的であると謂つてゐることはやがて――それはこのテーゼの云はゞ自個發展の時間であらう――逆に空間は客觀的ではないといふアンティテーゼに轉成(werden)しないではゐられない。このディアレクティークの裡に空間に關する客觀說――さう呼ぶとして――がその實證的な强みにも關はらず、それに反對する主觀說を常に說得出來ない匿れた理由が潛んでゐる。無論主觀說はこの理由をば自分の積極的な根據とはしない(それは實は不可能である、何となれば客觀と共に主觀と呼ぶことまでも吾々は否定したから、恐らくそれは例へば空間表象が表象であるといふことをばその積極的な根據とするであらう。處がその根據が不當であることをば私はすでに、空間表象といふ概念內容とその表象內

容との區別によつて說明した。それによれば空間は客觀的でなければならなかつた。處が又その客觀性は許されないことゝなる。そしてそれが客觀說をば主觀說から安全にしてゐるやうに見える。さて之は空間を主觀と考へるのも客觀と考へるのも根本的な立場に於て不當であることを物語つてゐるのに外ならない。始めから主客對立の立場――認識論的な立場――に立つことによつては空間の問題は不能となるか或ひは回避される外はないであらう。却つてまづ始めに空間があり之によつて今の場合の主觀も客觀も成り立つ理由を得るのである。空間そのものは主客の對立を認めない立場に於て始めて正しい問題となることが出來る。之が空間を「存在論的」と考へねばならなかつた私の理由の證明である。

＊空間の概念のこのディアレクティークは、私がすでに前半に於て指摘した客觀の概念の持つアンティノミーと深く關係してゐる。後者は空間が存在論的でなければならないことを直接に暗示する。

すでに空間が何故に制約といふ意味に於て範疇でなければならないかといふ理由が說明されてある。之と今の證明との綜合は空間が存在論的範疇として求められる必然性を說明する筈である。存在といふ常識的な出發を前に權利づけたので

あるから「存在の存在論的範疇は空間である」といふ結論に導く目的論的な過程が、今に justify されたわけである。

私は約束の問題に引き返さう。空間が「内容」(Qualität) を持つといふことへ。それを持たねばならぬといふことはすでに存在論的範疇の性質から演繹されてある。問題は何がその内容であるかである。併しまづ内容といふ概念に就いて斷つてをかねばならぬのは、私が前からさう呼んでゐるのは或る特殊の立場や格別な研究から來る結果として用ゐられる術語ではないといふ事である。(術語としての内容は例へば對象とか客觀とかから複雜に區別されるであらう。) さうではなくしてそれは最も廣い意味に於ての形式に對する内容なのである。又それを Qualität といふ言葉と相卽したのは、今の問題――空間の問題――にあつては、或る他の一般的な事情からさう呼ばれてゐるものゝ内に、恰も今の「内容」が適々含まれて來るであらうと思はれるからである。普通に範疇――認識論的範疇――は今の意味で無内容と考へられる。例へば概念は形式的(無内容)であるが實在や觀念には内容があると云ふ言葉が許される時――そして内容といふ概念を適當に撰べばこの區別は必ず許され

るであらう――その意味に於て範疇は普通無内容と考へられる。範疇とは多くの場合内容的な例へば實在や觀念やが通用しなくなると思はれる時それの代りに導き入れられた言葉であるであらう。所が存在論的範疇は之に反して正にこの意味に於ての内容を持つてゐなければならなかつたのである。そこで空間も亦内容を有つてゐる筈である。さて何がその内容であるか。私は空間概念の向のディアレクテークを再び思ひ起こす。空間を客觀的であると謂ふならばやがて空間は客觀的ではないと謂はれなければならなくなると。それは空間にもし客觀といふ概念を許すとすれば主觀といふ概念をも許さなければならないからであつた。そしてそれは又空間が主觀と客觀とを共に同時に可能にするからであつた。即ちこの矛盾を止揚するのは空間が主客の對立を可能にするといふジュンテーゼである。處で一般に主客の對立を可能ならしめるものは或る意味に於て主觀でもありそれと同時に必ず又客觀でもあり得るのでなければならない。であるからそれを主觀又は客觀から出發して特徴づければ主客の合一でなくてはならない。無論始めに合一がありそれによつて始めてそれが特に主客の合一と考へられるのであるから、このやうにして特徴づけるのは不充分であると云ふならば、さうとすればまづ或る

直接なものがありそれが主觀と客觀とに分化すると云ひ改めてもよい。何れにしても主客の對立を可能ならしめるものはかくなくてはならない。人々は之を普通「直觀」と呼ぶ。私は用語の爭ひを避けるために、以上の特徴を有つものを改めて一般に「直觀」と定義してよいであらう。さう定義するとすれば向のディアレクティークのジュンテーゼとしての空間も亦「直觀」であることゝなる。空間が存在論的範疇であると云ふだけの場合には、卽ちそのやうに形式的に云ひ表はされただけの場合には、それが直觀であるといふ事情はまだ顯はれない。併しこの存在論的範疇としての空間の事情そのものを分析して行く時、それが實は又直觀であるといふ新しい言葉を要求するだけの新しい事情が浮び出て來るのである。この新しい事情の浮び出て來ることの出來るといふことが、正に存在論的範疇が內容を有つと云はれる理由に外ならない。「內容」は「直觀」である。(どう考へても認識論的範疇でなければならない處の例へば自同の範疇からは、たとへそれをどう分析しても今の意味での內容は浮び出ないであらう。)かくして形式的には單に存在論的範疇と名づけられてゐた空間は、內容的には直觀でなければならない。* 次に何故に空間のこの內容をQualität と呼んだかは一つの他の事情から來ると云つた。それは例へば Ehrenfels が一般

に形態內容（Gestalt*qualitäten*）は，positive Vorstellungs*inhalte*，“であると云つた言葉の上からも一應理解出來るであらう。或る人々は空間の形態を無內容な形式と考へるが、それが形態に固性な性質（Qualität）を有つことによつてもはや單に形式ではなくして——全く形式ではないと云ふのとは違ふ——又今私の云ふ意味での「內容」でなければならぬ、と他の人々は考へる。そして後者の人々はこのやうな形態はそれ自身で直接性——他のものから導來されないといふ意味に於て——を持ちそれが個有な感覺乃至知覺であると主張する（例へば K. Bühler, Die Gestaltwahrnehmungen Bd I. S. 17 u. a. O.）。處で私が存在論的範疇としての空間は內容として直觀であると云ふ時、それは心理學によつてこのやうな心理的現象と見做されるもの——それが終局に於て心理的であるのか無いのか私自身はまだ何處にも決めてゐない——に對する、一つの哲學的な解釋に相當すると云ふことが出來る。それ故私は Qualität といふ言葉を心理學から借りて「內容」といふ言葉に多少の方向を與へてよいと考へたのである。

＊空間が直觀であるといふこと——それは空間が存在論的範疇であるといふことゝ同じ事情を云ひ表はす——によつて、心理學の所謂空間表象と幾何學的

空間と及び物理的空間とが割合統一的に關係づけられるといふことをば、すでに擧げた三つの文章に於て私は顯はさうと志した。併し直觀といふ言葉に對して或る根本的な不明があつたために――それは後で明かにする――それは決して判明ではなかつたと思ふ。

この斷章の今迄の結論――空間といふ存在論的範疇の內容は直觀であるといふ結論――を或る慣らされた觀點から云ひ直すとすれば、空間は範疇であると同時に直觀である、といふことである。人々はこの觀點から見て、この結論が別なものを餘りに「無雜作」に同じと考へたかのやうに云ふかも知れない。範疇をどれ程つきつめても直觀が出て來る理由は何處にも無いではないかと云ふであらう。無論範疇といふ概念の概念內容からは、たとへそれが存在論的範疇であつたとしても、それが直觀であるといふことは引き出せない。併し常に考へねばならぬやうに、私は何處にも範疇といふ概念を取り扱つてゐるのではなくして必ず範疇そのもの――事情――を取り扱つてゐる。それ故この意味に於て人々の反對それ自身は正當ではあるが今の問題は夫れには觸れてゐない。更に人々は云ふであらう。たとへ範疇そのもの――事情――を、而も存在論的範疇そのものを、取り扱つたにしても範疇から直

觀を導き出すことが一般には出來るとは信じられない、と。その時私はこの言葉をたとへ承認しないまでも否定することは出來ないかも知れない。けれども問題は範疇と直觀との一般的な關係に就いてゞはなくして、常に空間といふ特殊な場合に就いてゞあつた。それ故もし空間そのものゝ事情にあつてさうあるならば――私はこのやうな原始的な事情を最も正當な意味で「事實」と呼ばう――この特殊の「事實」は一般的な關係によつて裁かれるべき筈ではなく却つてそれがこれを左右するのでなければならない。もし空間は範疇であると同時に直觀であるといふ向の結論が、空間に特有な「事實」であるならば、卽ち例へば二つのものを結び付けやうと欲し勝ちな吾々の動機からさう云ふのでないならば――この動機によつて行動する時始めて「無雜作」といふ向の言葉が許される――その結論は「無雜作」であるのではない。繰り返して云へば無雜作でないためには空間は範疇であると同時に直觀であるといふ「事實」が指摘されてなければならない。處が今までにはこの「事實」は必ずしも指摘されてゐないであらう。といふのは空間が一つの範疇であり而もそれが存在論的であることが明かにされ、そして後者からしてそれが直觀であることが明かにされたのであるが、この場合の直觀は單に「主觀と客觀との合一」と定義されてゐたに過

ぎない。であるから直觀はまだ「事實」に於て檢證されてはゐなかつた――直觀は定義されるよりも直觀し又は直觀されねば直觀とはならない。その檢證がなければ向の結論は不充分であるがそれがあれば又充分である。私は空間に就いて今までとは別の途を取ることによつてこの檢證を得やう。卽ち事實に於ける――それは定義されたといふのとは異る――直觀をば概念から區別して檢證しやう。といふのは概念そのものは認識論的であり、從つて存在論的であつた處の今の場合の直觀はまづ何よりも先に概念から區別されてある筈であるから(前半を見よ。)處で恰も空間は概念ではなくしてこの意味に於て――檢證されたといふ意味に於て――直觀でなければならない。例へば右と左の區別は概念によつては與へられない。もし與へられ得るならば右と左を恐らく直觀を借らずに定義しなければならないであらうが、そのやうな定義はどう與へられるのか。併しそれにも關はらず右と左の區別は「事實」である。鏡に寫る像と實物との幾何學的な相違――それは Spiegelung による左右の區別であるが――(Kant, Prolegomena § 13)、又蔓草の右卷きと左卷きとの區別 (Kant, Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissschaften. Phoronomie) はカントが指摘したやうに概念によつては與へ得られない處の直觀の事實である。そしてこの左右

の關係が正に空間に於ける關係である外はない。空間はかくして事實上――直觀といふ定義に當て嵌まるばかりではなく――直觀として檢證されるのでなければならぬ。故に空間が形式的には存在論的範疇と考へられると共に、內容的には直觀として檢證される、といふことは空間そのものゝ根本的な事情――事實である。これこそ空間に特有な、從つて空間以外の問題からの Konsequenz として空間を取り扱ひ得るかのやうに想像してゐる人々にとつては無雜作な結び付きとも見えやう處の、眞理である。之を疑ふことは、であるから、始めから空間の問題そのものを疑ふことゝなるであらう。

空間――それは存在の存在論的範疇である――は直觀であることが明かにされた。併し恐らく直觀と呼ばれてよいものは空間には限らないであらう。空間はどのやうな直觀か。そのことは、空間が(一)存在の(二)存在論的な(三)範疇であるといふことから、規定出來る筈である。何となれば前者と後者とは同じ事情を云ひ表はしてゐた筈であるから。第一に空間は存在に關はるものであつた。存在とは普通常識的に外界、自然などと呼ばれることを指す。人々は云ふであらう、吾々が學的に――常識的にではなく――思索する時內界に對する外界、精神に對する自然といふ區別

は必ずしも立てられない、何となればどうして兩者の區別に規定を與へることが出來るかは見出せないであらうから、と。處で私は云はう、それ自身に於て區別されてあるものへ他の何ものかに據つてその區別の規定を與へやうとすることは、始めから出來る筈はない、と。內外の區別は內外そのものが與へるのであつて他の何ものかゞ與へ得るのではない。そしてこの內外の區別を與へ得る處の內外の區別そのものが空間にあるのである。空間のみが外界を內界から、自然を精神から區別し、外界を自然を成り立たせることが出來る。處で今空間は直觀であつたからして空間は恰も特にそのやうな直觀でなければならない。空間は「外的直觀」である。カントが空間を äusserer Sinn に關係させて規定した時、恐らく人々が想像するやうに Sinn そのものゝ區別からして空間を äusser と決めることが出來たのではなくして、却つて始めから外的直觀である處の空間からして或る一定の Sinn を äusser と決めることが出來るのである——恰も內部知覺と外部知覺とをもし知覺そのものから區別しやうとするならば恐らく成功しないであらうやうに。空間は外的直觀、外觀 (Hinschauen) である。もし假に時間も一種の直觀であると假定するならば、この點に於て始めてそれは空間と區別されなければならない。第二に空間は存在論的であつた。從つ

て少くともそれは凡ゆる意味に於て主觀にぞくしてはならない。從つて又ロゴスから生まれてはならない――前半を見よ。卽ちこの意味に於て概念であつてはならない。處が人々は概念そのものにも直觀が基礎を與へてゐなければならないと云ふであらう。それが正しいか否かは問題の外として、もしさうとすればその直觀は少くとも、概念とは區別された事情そのものである處の直觀――それが今まで吾々の取り扱つて來た直觀である――とは區別されてあらねばならぬ。概念そのものゝ基礎となつてゐる直觀――それを人々は或る名を以て呼ぶことが出來るであらう――から區別されたといふ意味に於て、空間の直觀は感性的であると云ふことが出來る筈である。カントが直觀は凡て感性的でなければならないと云ふ時、その直觀はとりも直さずこの感性的直觀を指す。空間は「感性的直觀」である。繰り返へせば空間が存在論的である以上それは常に感性的直觀でなければならない。*

* 幾何學的空間とも呼ばれるべきものも一つの直觀であり而もそれは感性的直觀である處の空間とは異つた直觀である、といふことを私は他の折に明かにした(「幾何學と空間」「思想」五六―五七)。今もしそれを正しいとすれば、幾何學的空間は少くとも直接には――たとへ間接にはそれから說明出來るものでなけ

ればならぬにしても――存在論的ではないことゝなる。處が人々は幾何學を對象論的なものと呼ぶ理由を有つかも知れない――この理由によつて Farben-geometrie とか Tongeometrie とかいふ言葉に意味があり得る。さうすれば少くともこの點に於て所謂對象論的なものは、私の云つて來てゐる意味で存在論的であるものと、區別されることゝなる。併し二つのものがどう違つてゐるかを一般に明かにするには到らない。

第三に空間は或る範疇であつた。故に空間の直觀はこの點に於て他の直觀と別でなければならない。卽ち空間の直觀は他の外的直觀とは異つてそれの制約となるものでなければならない。この意味に於て私はカントの言葉を借りて之を純粹直觀と呼ぶのが適切であると思ふ。このやうな純粹直觀なくしては普通感覺と呼ばれてゐる或る特殊の內容 (Qualität) が空間の內にあるといふ事情はなり立たない。故に空間がなければ特殊の Qualität――それは例へば色といふやうな感覺又は知覺を意味する――はないといふ言葉は許される。處がこの言葉は次のことを含んでゐる。卽ち、空間といふ直觀と例へば色といふ感覺としての Qualität とは別であると。この區別を承認したとして向の言葉は次の二つの異つた結論を導くかのやうに見

える。空間とこの內容とは必ず常に結び付いてゐる筈であり從つて第三者に於て兩者が成り立つのであるといふ結論か、それともさうではなくして空間に於てこの內容が成り立つのであつて第三者はその場合必要がないといふ結論か、の二つ。前の場合であるならば、單に空間がなければこの內容がないばかりではなく、又この內容がなければ空間もないことゝなる。之に反して後の場合であるならばこのことは少くとも同じ意味に於ては成り立たない。この內容はなくとも空間はあるであらう。處が空間は制約であつた筈であるからそれ自らが他の第三者に於て成り立つのであつてはならない、それ自らに於て成り立つのでなければならぬ。それ故もし假に前の場合のやうに第三者があるとしてもその第三者は又空間自身でなければならない。であるから前の場合は後の場合に含まれて來る。さうすれば空間はかの內容はなくてもあるのでなければならない。空間といふ直觀は例へば色といふ感覺としての內容と並立的に結び付くのではなくして上下の關係に於て結び付くのである。無論空間が一般に或る意味に於てこのやうな感覺と結び付いてゐる以上、その意味に於てこの感覺なくしてはあり得ないのではあるが、この關係は空間がなくしてはこの感覺もあり得ないといふ關係と同じ意味に理解されてはならな

い。そこには上下の關係がある。そしてこの關係故に吾々は始めて制約として空間をとり出し、之を他の直觀――それは向の感覺を含む――から區別して純粹直觀と呼ぶことが出來たのである。であるから例へば純粹直觀はない、あるものは常に純粹ではない處の――經驗的な――直觀だけではないか、といふ批難は純粹直觀の否定となることは出來ない。何となれば純粹直觀でない處の直觀だけであると云ふその時、その直觀がとりも直さず純粹直觀によつて成り立つてゐるといふのが吾々の主張なのであるから。カントが、空間に於ける對象が無いと考へることは出來るが、空間が無いと思ふことは出來ない、と云つた言葉は、決して空間と感覺內容との不離の關係に以つて反對されるべきではなく(例へば Marty, Raum und Zeit S. 8 ff.)、空間が制約であること、卽ち純粹直觀であることを明かにしてゐるものとして理解されるべきである。空間は他の直觀の制約であるといふ意味に於て「純粹直觀」である。云ひ直せば空間は純粹直觀であることによつて一つの存在論的範疇であることが出來る。さて私は空間が一方に於て存在の存在論的範疇であり他方に於て又直觀であることから、空間の直觀を三重に決定することが出來た。それは外的直觀であり更に感性的直觀であり且つ純粹直觀である。※

＊之はカントの第一批判感性論に於ける空間の規定と平行してゐるであらう。カントは直觀から――〔形而上學的吟味〕に於ける――出發して直觀形式――〔先驗的吟味〕に於ける――へ到着する。今もしこの形式を（カントは之をその所謂範疇卽ち吾々の言葉によれば認識論的範疇から區別した）存在論的範疇と解釋することが許されるならば、私はカントとは方向を逆にして、而もカントと平行してこの存在論的範疇から出發して直觀へ到着することになる。

最後に一つの質問に答へやう。空間は直觀であるとして直觀は意識にぞくすか。かく問はれる時私は逆に意識とはどういふ意味かと問はねばならぬ。もし意識が對象を內に寫す――模寫說のやうに――ものであるならば、又は對象を構成する――批判主義のやうに――ものであるならば、それは主觀である。併しすでに決めたことによつて直觀は主觀であつてはならない。であるからこの場合ならば直觀は意識にはぞくさない。もしこの場合でないならば人々は意識といふ言葉によつて何を理解してゐるのかを說明する責任があるであらう。私はその說明を聽いた上で直觀が意識にぞくすかぞくさないかを答へるであらう。併し少くとも次のこと

だけは明かである。まづ存在論的範疇として空間があり之を意識することによつて――意識といふ意味が何であらうと――始めて空間の直觀を得るのではないといふこと。卽ち意識の外にあつた空間がこの時始めて意識に這入つて來る、吾々に觸れてくる (zugänglich wird) のではないといふこと。もし意識といふ言葉が何かの意味で許されるならば、さうすれば空間は始めから意識の內にあるのであり、又もし意識といふ言葉が許されないならば、さうすれば空間は最後まで意識とは無關係である。であるから空間が直觀であるといふ點に於て特に意識を云々する理由が出て來るのではなくして、すでに空間が存在論的範疇であるといふ點に於て、云々されるべきものならば云々される理由があるのである。空間の直觀がではなくして空間そのものが意識にぞくすとかぞくさないとかゝ云はれるべきである。處で私は空間が意識にぞくすかぞくさないかを決めることは、向に述べた理由によつて、出來ない。併しあらゆるものがさうであるやうに、空間は少くとも直接といふ意味に於ける――前を見よ――現象にはぞくしてゐなければならない。空間は現象の一つの「在り方」である、云ふならば「在る」ことの一つの「性格」(Dacharakter) である。空間が存在論的範疇であるとは、空間がこのやうな一つの性格であるといふことを云ひ表はし、

空間が直觀であるとは、その性格がどんな性格であるかといふことを云ひ表はす。吾々は今の場合の直觀をまづ何よりも先に――それが意識にぞくすかぞくさないかよりも先に――性格として理解しなければならない。之が直觀は意識にぞくすかといふ質問への答へである。

空間は性格にぞくす。それは主觀客觀關係にぞくすのでもなく又可能現實必然の Modalität にぞくすのでもなくして、正に性格にぞくすのである。空間をば主客關係によつて又 Modalität によつて理解しやうとする時、問題そのものが不能となるか或ひは回避されるかである。何となれば空間は主觀でもなく客觀でもなく、又可能性でも現實性(實在性)でも必然性でもないから。空間はそのやうなものゝ系列とは全く別な一つの系列――性格といふ――の一項である。そしてこのことが空間をば存在論的範疇として求めた最後の理由に外ならない。*終。

* 空間の直觀はその色々な內容規定を持つ筈である。例へば三次元性、直線性、連續性、等質性、等方性など。併しこの問題は割合獨立に取り扱ふことが出來るからして、他の機會に讓ることゝする。

一九二六、一一、一四